

てんじ かんしょう
展示を楽しむための鑑賞ガイド

そくおう たからもの 即翁さんの宝物



そくおう 即翁さんってどんなひと？

はたけやまいっせい たいしょう えばら
本当の名前は畠山一清。大正時代に、荏原
せいさくじょ
製作所というポンプの会社を作った人です。

のうがく そくおう
茶の湯や能楽が大好きで、「即翁」という名前
で、文化に関わるいろいろな活動をしました。

びじゅつひん はたけやま き
50年かけて集めた美術品をもとに、畠山記
ねんかん びじゅつかん
念館という美術館を作っています。

はたけやまいっせい そくおう
畠山一清 (即翁)
(1881 ~ 1971)

みんなで楽しむ

集めた大切な美術品が、誰の持ち物か分かるように捺
あいぞういん
す印を「愛蔵印」と言います。即翁さんの愛蔵印には、
そくおう よしゅうあいがん そくおう いっしょ
「即翁與衆愛玩」（意味：即翁はみんなと一緒にこれを楽し
みます）という言葉が刻まれています。

すば びじゅつひん ひと じ
素晴らしい美術品を独り占めするのではなく、「多くの
いとっしょ
人と一緒に楽しみたい」という即翁さんの思いが込めら
れているのです。



愛與即
玩衆翁

特別展「畠山記念館の名品—能楽から茶の湯、そして琳派—」 会期：2021年10月9日～12月5日
会場：京都国立博物館 平成知新館 編集：京都国立博物館 教育室 発行：2021年10月9日

そくおう
即翁さんが集めたのは、日本、中国、
ちようせん こびじゆつひん
朝鮮半島の古美術品です。それらは「茶
の湯」「能楽」「琳派」という大きな3つ
のテーマに分けられます。

茶の湯

のうかく
能楽

りんば
琳派

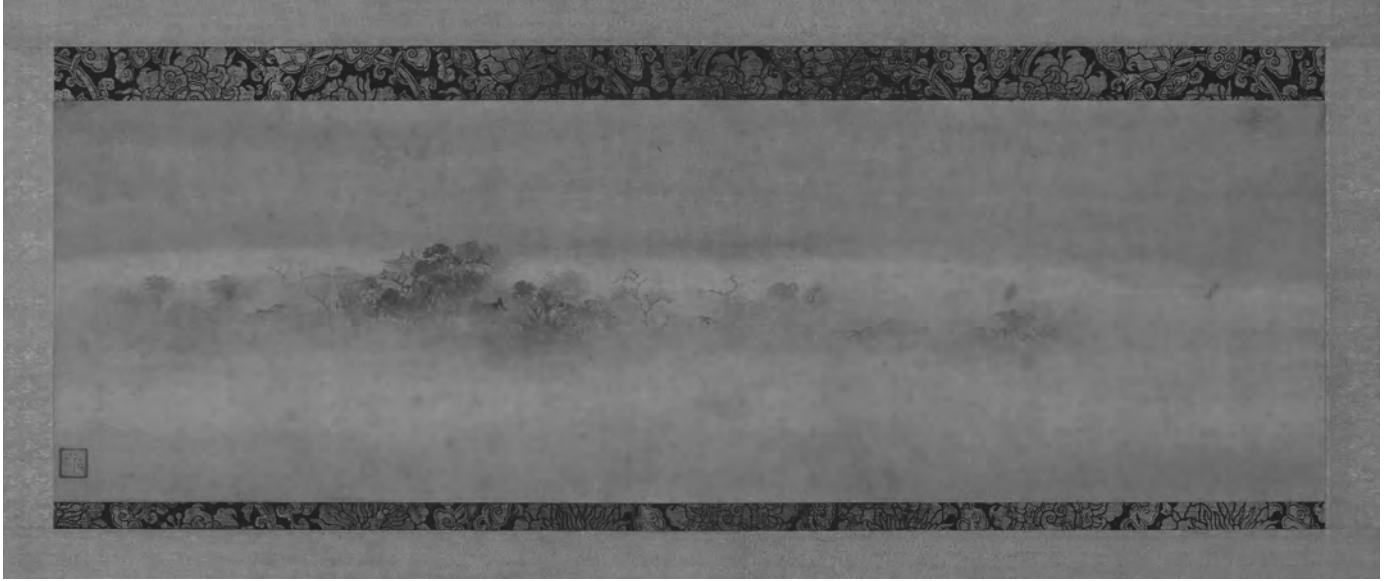
それぞれの中から、とっておき
しょうかい をご紹介しましょう！私と一緒に
楽しんでくれたら嬉しいな。



そくおう
即翁さん

茶の湯

お客さんを招き、抹茶を振る舞って楽しむのが「茶の湯」です。茶会をする主人は、お茶を点てる道具だけでなく、見て楽しむ掛軸など、茶室で使うものを心を込めて準備します。



鐘の音が聞こえてきそう

中国の有名な水辺の風景を描いた「瀟湘八景」の一つ。夕暮れに霞がかかって、遠くのお寺から鐘の音が聞こえてくる様子を、淡い墨で描いています。日本の水墨画に大きな影響を与えた牧谿が描いたと伝えられています。

国宝 煙寺晩鐘図 伝牧谿筆 中国・南宋時代 13世紀
畠山記念館蔵 後期展示

あしかがよしみつ おだのぶなが とくがわいえやす
足利義満、織田信長、徳川家康と
いう、すごい人たちが持っていた
作品なのです。



戦国武将憧れの茶碗

井戸茶碗は、朝鮮半島で焼かれた日常的に使う器のこと。日本では茶の湯で大切にされました。中でも有名な三つの井戸茶碗は「天下の三井戸」と呼ばれます。この「細川」はそのうちの一つ。優しくて存在感のある、美しい茶碗です。



重文 井戸茶碗 銘細川 朝鮮半島・朝鮮時代 16世紀
畠山記念館蔵 通期展示



あこが まついらふまい ちやわん
憧れの松平不昧も使った茶碗！
ふまい えど だいにやう いだい
不昧は江戸時代の大名で、偉大な茶人です。

のうがく 能楽

能楽は、日本の古い芸能のひとつ。役柄を表すお面や、華やかで豪華な着物を身に着け、うたや演奏に合わせて物語を演じます。



能面 翁（白色尉） 伝福来作 室町時代 15～16世紀
畠山記念館蔵 前期展示

私の生まれ育った石川県金沢市は、江戸時代には、前田家の殿様が治める加賀藩の中心地でした。加賀藩では殿様から庶民まで、みなが能楽に親しまいました。その伝統は今も続いています。

私も能楽の謡（うたうこと）が得意なんです。私のふるさと金沢に伝わった能面や装束を、たくさん集めました。



能楽の古いかたちを伝える面

「翁」という特別な能楽を演じる時に使う面です。「翁」は、能楽が今のように整えられる前の、古いかたちを残しています。この面は、能楽が盛んになりはじめた室町時代のものと考えられます。まだ面の形がきっちりと決まる前の、おおらかさが大きな特徴です。

この面は、加賀藩の殿様のもとにあった可能性があります。



生命力と豊作を表す装束

鮮やかな紅色の地に、金色の雲と、雪をかぶった椿が描かれています。能楽の舞台で身に付ける「唐織」という豪華な着物です。加賀藩で盛んだった「宝生流」という能楽のかたちを伝える家にあったものをお手本に、まねて作ったようです。

これは加賀藩の殿様が持っていたもの。



着物を包む紙に江戸時代の字が残っていて、どんな能楽を演じる時に着るのがよいか書いてあるんですよ。



雲に雪持椿文様唐織 前田家伝来
江戸時代 文化11年（1814） 畠山記念館蔵 後期展示

琳派

琳派は、過去の作者に憧れて学んだ人たちが、時代を超えて繋いできた美術の流れの一つ。桃山時代の俵屋宗達や本阿弥光悦がその始まりです。大きな絵から、暮らしの中で使う小さな工芸品まで、様々なものを華やかに彩ってきました。

絵と書、どちらも主役



重文 四季草花下絵古今集和歌巻 本阿弥光悦書 俵屋宗達下絵 江戸時代 17世紀 畠山記念館蔵
後期展示（※前期にはこれに似た「薄下絵古今集和歌巻」を展示します）

私が美術品を集めていた頃、ちょうど「琳派」の研究がとても盛んでした。

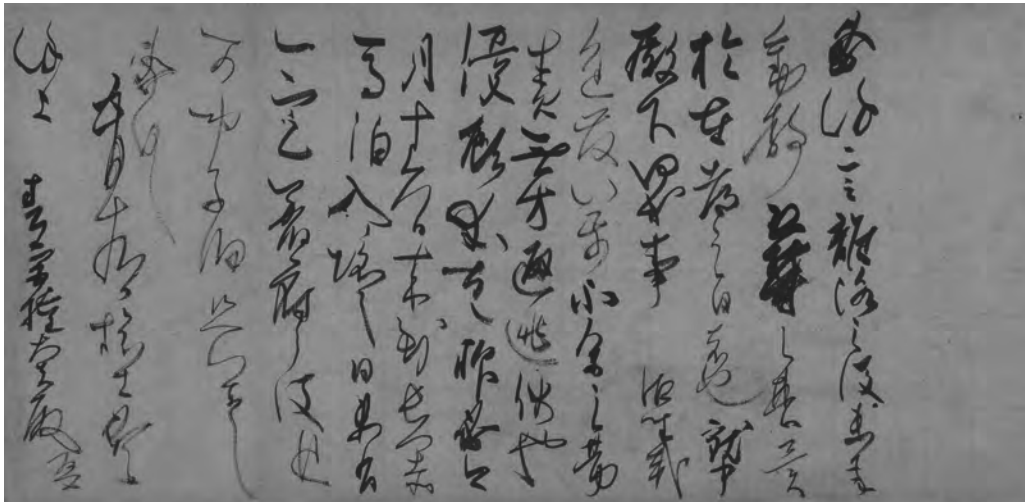


美術好きな先輩たちも集めていて、私もその魅力に惹かれたのです。

俵屋宗達が金銀で草花を描いた上に、本阿弥光悦が和歌を書いています。宗達の絵は、絵具の濃さを使い分けたり、余白を取ったりして、強弱がありますね。光悦の書もそれに合わせるように、墨の濃さや線の太さ、文字を書く位置に変化をつけています。絵と書が引き立てあって、心地よいリズムを生み出しています。

美しいものを追い求めて

「茶の湯」「能楽」「琳派」の枠に収まらないものも、即翁さんは集めています。



国宝 離洛帖 藤原佐理筆
平安時代 正暦2年(991)
畠山記念館蔵 前期展示

平安時代の書の達人三人を、「三蹟」と言います。この手紙はその中の一人、藤原佐理が甥っ子に宛てたもの。偉い人に挨拶しないまま遠くに行くことになってしまったので、お詫びを伝えてほしいと頼んでいます。書き始めの落ち着いた筆づかいが、だんだん速くなり、後半は一気に書き進めています。旅の途中で慌てて書いたものですが、見事な筆づかいです。

大胆で豪快！
誰もが認めるものも良いけど、
型やぶりの作品も好きなのです。

